

韓国語母語話者の複合動詞「～出す」の習得

日本語母語話者と意味領域の比較を中心に

白 以 然*

キーワード：複合動詞，「～出す」，意味領域，無標性，文判断テスト

要 旨

本稿は複合動詞「～出す」において、韓国語を母語とする学習者はどのような「意味領域」を持ち、母語話者とはどのようなところで相違しているかを考察する研究である。「～出す」は出現頻度の高い語彙であるだけでなく、学習者の母語である韓国語にもそれと似ている意味と用法を持つ対応語（「～내다 (nae-da)」）が存在する。特にこの母語対応語の概念が日本語語彙の概念形成にどのような影響を与えるかを考察する。そのため 22 項目の「～出す」が使われた文判断テストを実施したが、そのうち半分である 11 項目は学習者の母語である韓国語の直訳では自然であるが、日本語にすれば不自然な文である。実験の結果、学習者は 22 項目のうち、17 項目で母語話者と有意な差を示し、両者の語彙に関する概念に差があることがわかった。様々な項目において、学習者は母語の対応語の意味を「～出す」に適用する傾向が見られたのである。しかし、学習者が母語直訳のみを頼りに、母語の概念をそのまま目標言語に適用して判断を下したのではなかった。「～出す」の様々な意味の中で「基本的で具体的な意味」を含んでいる項目の場合、学習者の受容度はより高くなっていたが、ここには母語の「無標性」と「～出す」の意味構造という 2 つの要因が絡んであると思われる。母語で「有標」と感じられた項目の受容度はそこまで高くなかった。学習者の判断基準は母語知識の選択的な使用、日本語に対する不完全な知識、またその語彙に関する学習経験から形成され、このように様々な要素が介入するので、母語話者とは違う意味領域を持つようになると思われる。

1. はじめに

上級以上の学習者においても複合動詞（前項動詞の連用形＋後項動詞）は難しい項目と言われてきた（松田 2004, 森田 1977）。その要因としてはまず、前項動詞（以下 V1）と後項動詞（以下 V2）の結合様式や意味の派生が一律ではないことが挙げられる。例えば、「飛び上がる」は「飛んで上がる」としてそのまま解釈できるが、「言い忘れる」は「言うことを忘れる」になる

*BAEK Yiyun：お茶の水女子大博士後期課程。

等、「複合動詞」といっても V1 と V2 の関係と構造は異なる。また、本動詞としては使われなかった新しい意味が複合動詞の用法としては派生、使われることもある。例えば「雨が降り出す」の V2 「～出す」は本動詞用法にはない「開始」の意味を表す。そもそもほとんどの動詞は、1 つ以上の意味を持っているので、簡単に習得される項目とはいえないが、2 つの動詞が多様な結合様式によって複合動詞になり、新しい意味が加わると、学習者には一層難しくなるわけである。また、このような複合動詞は日本語の動詞の 4 割を占めている（森田 1977）と報告されているほどその数も少なくないので、学習者としては避けられない項目でもある。

数多い複合動詞の構成要素のうち「～出す」は、頻度がもっとも高いものの 1 つである。国立国語研究所の『複合動詞資料集』（1987）によると、複合動詞構成要素 2166 語の中で V2 の「～出す」は延べ 432 語で「～得る」と共に 1 位を示す。「～出す」は多く使われる代表的な複合動詞であることがわかる。また、具体的な「ものの移動」を表していた本動詞が、V2 として使われるときは時間的なアスペクトにまでその意味が拡張され、使用領域も広い。

姫野（1999）は「～出す」の意味を大きく 3 つに分けて説明している。①基本となる意味として、具体的なものの「外部への移動」（ex. 追い出す）、②隠れていたものが姿を現す、無から有が生み出される「顕在化」（ex. 思い出す、聞き出す）、③アスペクトとして、動作や作用の「開始」（ex. 雨が降り出す）がその 3 つである。これらの意味は互いに関連しあっているが、森田（1977）は「①中にある事物を外側へ、表面のほうへと移し現れるようにするという意から、②新たな状態を発生させる意へと発展し、そこから③新たに事が始まる意へと転じていく」といい、「移動」が「開始」になる意味の展開過程を説明している。

一方、日本語と同じく膠着語として分類される韓国語にも 2 つの動詞の結合による複合動詞があり、「～出す」に当たる、外への移動を表す複合動詞「～내다（～naida）」が存在する。しかし、両語の意味および用法には共通点だけではなく、相違点も存在するため、直訳ストラテジーのみですべての用法を習得することは難しい。李（1996）は日本語の「～出す」と韓国語の「～내다」の意味の対照分析を行い、姫野（1999）と同じく両語の意味を 3 つに分けて対照している。両語の共通点はまず、基本義が「ものの移動」であり、それに加え「表出」の意味も持つことが挙げられる。ここで「表出」とは姫野（1999）の「顕在化」とほとんど同じ概念である。即ち、両語共に、「外への移動」という具体的で物理的な動作を、目に見えない抽象的なものごとの出現・創出にまで拡張して使っていることである。しかし、これが 3 番目の意味になると両語の差が出る。日本語の「～出す」がアスペクトとして「開始」を表すのに対して、韓国語の「～내다」は「完遂」を表わすようになる点である。

本稿では日本語の複合動詞後項「～出す」を、韓国語を母語とする学習者がどのように捉えているか、学習者と日本語母語話者とは、どのようなところで 1 つの語彙に関する概念の差が出るかを見る。特に学習者がすでに持っている母語の概念が目標言語の対応語の概念形成に及ぼす影

響を中心として調査と考察を進める。

2. 先行研究および研究課題

新しい知識の習得に既知の知識を利用するということは人間認知の自然な作用でもある。第2言語(以下L2)の習得において、すでに形成されている母語(以下L1)知識の影響は昔から様々な側面で論じられてきた。しかし、学習者が新しい言語を習得するとき母語知識のみを頼りにしているわけではない。母語の影響を受けやすいところとそうではないところが存在するわけである。様々な言語領域の内、意味は比較的母語の影響を受けやすい部分(Tanaka & Abe, 1985)として挙げられる。学習者は母語の語彙に関してすでに持っている抽象的な意味合いをL2の対応語に適用しがちだからである。しかし、学習者がL1での意味と概念をそのままL2の当該語に転移させるわけにはいかない。Kellerman(1979)は、オランダ語を母語とする英語学習者に、オランダ語 BREKEN を使った17項目の文を見せ、それが英語の BREAK で表現できるかを聞いた。その結果、無標な項目、即ちL1で頻度と生産性が高く、基本的な意味に近い項目ほど直訳できるという答えが多く、転移可能性は高くなることがわかった。しかし、Kellerman(1979)はL1文を対象に、学習者がそれをL2に直訳する可能性があるかのみを見ているものであり、実際に学習者が持っているL2の意識を調べたものではない。

これに対し、今井(1993)と Shirai(1995)は日本語を母語とする英語学習者を対象に、「wear」や「put」のような基礎的な英語動詞の意味領域(meaning potential)を調査した。その結果、学習者の意味領域はL1の対応語である「身につける」や「置く」を中心に発達していて、対照群である英語母語話者とは異なる傾向を見せた。学習者はL1の当該語からの影響が根強く、L2のプロトタイプ¹的な基本用法にとどまる傾向があったのである。

特に、Shiraiの実験で学習者はL1・L2共にプロトタイプ的な基本義については受容度が高く、L1でも、L2でもプロトタイプではない項目については低い受容度を示した。また、日本語の「置く」にはない意味項目の場合、L2「put」のプロトタイプに近い方の習得が早かった。これを整理すれば、L1のプロトタイプ性は転移可能性と関連があり、L2のプロトタイプ性は習得可能性と関連があることになる。従って、Shiraiは学習者の意味領域はL1プロトタイプとL2のプロトタイプの相互作用によるとしている。

これらのことを踏まえると、韓国語を母語とする学習者の「～出す」の意味領域はL1の「～내다」を中心として発達している可能性がある。また、具体的で基本的な意味である「移動」を含んでいる項目は他の意味より学習者が受け入れやすいことが予想される。前述したとおり、

¹ プロトタイプの定義に関してはいろいろな立場があるが、ここでは Shirai(1995)などにしたがって、「多義語の意味の中でもっとも典型的で基本的な意味」として使う。

「～出す」と「～내다」は共に「移動」の意味を基本義として持ち、それが「表出」または「顕在化」の意味にまで拡張される。しかし、時間のアスペクトとしては、韓国語の「～내다」は日本語の「～出す」の「開始」の意味とは反対とも言える「完遂」の意味を持つ²。本稿では、このように学習者がすでに持っている L1 の知識が、L2 の意味領域にどのような影響を及ぼすか、韓国語母語話者と日本語母語話者の「～出す」についての認識を比較して考察する。

松田(2004)は「語彙能力」とは「単語を適切に使い切る能力」と定義し、これを養うのが「語彙習得」の目標だと言っている。すなわち、どの領域まで当該語が使われるかを正確に把握し、「その言語共同体でその語に対して適切と思われる反応ができる能力」のことである。したがって、語彙を習得したということは、その語が使われる領域と使われない領域を的確に把握することであり、母語話者が受容する文を受容、非受容する文を非受容する能力でもある。

本稿では、「～出す」を含んだ同じ内容の文判断テストを日本語母語話者と韓国人学習者の両グループに実施する。調査の項目は、すべて韓国語の直訳では自然であるが、日本語にすると自然な文（「移動」・「顕在化」の意味を持つ「～出す」）と不自然な文（「完遂」の意味を持つ「～出す」）で構成されている。今回は L1 との関係に重点をおいて「～出す」の意味形成を見るので、学習者の L1 にはない「開始」の意味を含んでいる文は扱わない。この調査は L1 の文を中心として転移可能性を見るという点では Kellerman (1979) に似ているが、調査対象文が L2 であり、その中に自然な文と不自然な文があることは Shirai (1995)、今井 (1993) 等に似ている。調査の詳細に関しては次の章で述べる。

3. 調査の内容

3-1. 対象者

対象者のうち日本語母語話者（36 名、以下母語話者）は 20～60 代の日本人男女である。方言の影響を考え、出身は関東（主に東京都と神奈川県）に限ったが、年齢と職業などは様々で、特定の階層に偏らない日本語母語話者の標準的な感覚を見ることにした。

韓国人学習者（64 名、以下学習者）はソウルにある大学 2 校の日本語専攻の 3～4 年生で、学習歴は 2～5 年、レベルは中上級から上級くらいであった。そのうち、日本語能力試験 1 級を

² これは、基本的に同様な現象を異なった心的視点から眺めているから起こることだと思われる。もし、「外への移動」をその移動が向かっている外部から眺めるなら、その移動によってなかった事態が発生（開始）したと把握できる。反面、何かが外に移動することを中側から眺めるなら、ある事態が自分の領域から除去される、「完遂」・「終わり」となる。韓国語の「～내다」の場合このような「完遂」の意味に使われ、主体の強い目標達成認識が含まれていることが多い（李, 1996）。また、李（1997）では特に不可能であったことをやっと成し遂げる「やっと」「なんとか」のような副詞、難しい問題を何とか解決できたという「完全に」などの副詞と共に起こることによって、完遂度と成就度を高めることが多いと述べられている。

持っている被験者は27名(42%),2級を持っている人は17名(27%)であった。参考として本調査を行う前,SPOT(Simple Performance-Oriented Test³)のD・E型を実施した結果,60個の問題の正解数は最小値40から最大値59で,平均は51.52であった。このように中上級以上の学習者を想定したのはある程度の日本語能力がないと「～出す」の入った様々な文を十分理解できないと予想したからである。

3.2. 調査内容

調査は文判断テスト22項目で,その文を読んだ自分の感じを「自然である まあまあ自然である あまり自然ではない 不自然である」の4段階⁴でチェックしてもらった。また,母語話者の場合は,不自然な文をどう直せばいいかを書くように指示したが,学習者には誤りを直すことは負担が大きいと考え,自然な文も,不自然な文も,自分がその判断を下した理由を自由記述するように求めた。

実験の対象となった文は,「～出す」を使うことが自然な文が11項目,不自然な文が11項目で半分ずつになるようにした。これらの文には「～出す」の用法以外には誤りのないように,日本語関連専攻の2人の母語話者にチェックしてもらった。自然な11項目は「移動」「顕在化」など両言語の共通の意味である。不自然な11項目は,韓国語の「～내다」が使われる「完遂」の意味であるので,全項目が韓国語の直訳では自然な文となる。このように母語の対応語「～내다」の直訳では自然な意味で構成された「～出す」22項目を,学習者はどこまで受容したか,その結果をみる。

4. 結果

4.1. 全体の傾向

まず,被験者の答えを,自然(+2),まあまあ自然(+1),あまり自然ではない(1),不自然(2)で数値化し,母語話者・学習者の平均を出した。「自然」予想11項目と「不自然」予想11項目を分けて母語話者と学習者の平均値をグラフ化すると 図1 のようになる。

全体的に見ると,母語話者の場合,自然な文と不自然な文が明確に分けられているのに対して,学習者は自然と不自然の判断がそれほどはっきりしていない。特に不自然が予想された項目についての抵抗感はそのままで目立たず,どちらかというところ「自然」だと解していることが

³ Simple Performance-Oriented Test. 筑波大学留学生センターにより開発された日本語能力のテスト。一文字の穴埋め形式のテストで,被験者は自然発話の速度で録音されたテープを聴きながら,空いた箇所を埋める。AからEまで5つのバージョンがあり,本研究で用いられたD・Eはもっとも難易度が高い。

⁴ 「どちらとも言えない」を入れる5段階の場合,中央に偏る可能性があるので,敢えて4段階に設定した。また,4段階にすれば,答えを「受容」「非受容」に分けて考察をすることもできる。

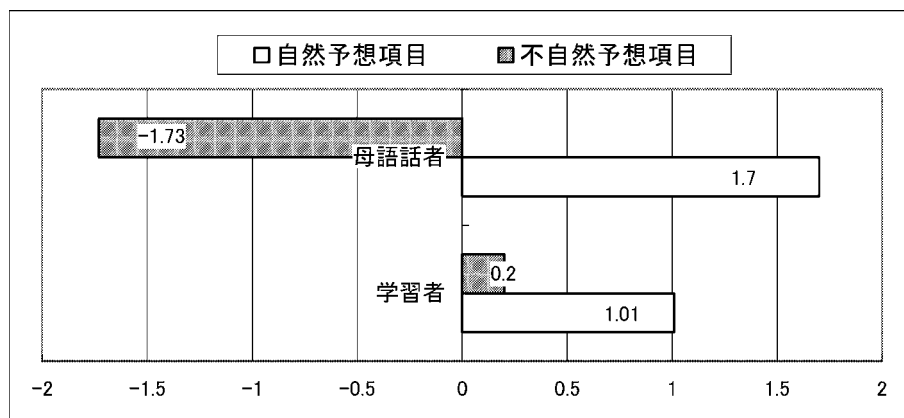


図1 母語話者と学習者の自然度平均

わかる。これは、今井（1993）と松田（2000）の受容度実験でも同様であったが、聞いたことのない間違った表現だとしても、学習者はその段階で自分が持っている語彙知識から自分なりに意味の拡張を行って判断するためだと思われる。また、不自然な項目がすべて母語直訳では自然な範疇に入ることも、このように「不自然」な文の受容度を高めた原因として考えられる。

次の節では自然と判断した項目と不自然だと判断した項目に分けて、項目別の結果を示す。その際、より解釈しやすいように4つの答えを2分割し、「自然」と「まあまあ自然」は「受容」、「あまり自然ではない」、「不自然」は「非受容」として、それぞれ被験者の割合を百分率で表す。また、²検定で両集団の判断に有意な差が出るかを検証し、学習者がどのようなところで母語話者と違った判断をしているかを見る。

4.2. 母語話者が受容と判断した項目

「自然」予想項目、即ち母語話者が「受容」と判断した11文について「受容」の方に をつけた被験者の人数を数え、百分率で表し、学習者の受容度の高い順に並べると 表1 になる。

母語話者と学習者の答えを²検定した結果、11項目のうち6項目が1%水準で有意差があった（**で表示）。項目別の受容度を見ると、母語話者は100%受容する項目が多く、平均94.9%の高い数値を示した。学習者の平均も母語話者より低いものの、79.5%でかなり高いが、項目によって96~54%でばらつきがあり、受容度が母語話者並みに高いものと母語話者より低いものがあった。ほとんどの項目において母語話者の受容度が学習者より高いが、1の「作り出す」のみ学習者の受容度が有意に高い。また、学習者の受容度が最も高い項目は「作り出す」と「思い出す」で、移動を表す項目ではなかったが、その次に受容度が高かった3つの項目（3・4・5）は「具体的な移動」と関わるものであった。

表1 受容された項目と受容度

(**p<.01)

番号	JA (N=36)	KO (N=64)	²
1	みんなで協力して一つのことを作り出します。	22 (61)	62 (96) 18.77**
2	つらかった時のことは思い出したくもない。	36 (100)	61 (95) 1.7
3	「ちょっと失礼します」と言うなり会議室を飛び出した。	36 (100)	60 (92) 3
4	口座から必要なお金を引き出す。	36 (100)	57 (89) 4.2
5	彼女は引き出しから、一枚の写真を取り出した。	36 (100)	55 (85) 5.6
6	彼女はこの作品で多様な青春像を描き出した。	31 (87)	55 (85) 0.1
7	人々が倒れた家々の中から、犠牲者を救い出している。	34 (95)	50 (76) 6.97**
8	その作戦を考え出したのは花子だった。	36 (100)	48 (75) 10.7 **
9	やっと実の親を探し出すことができた。	36 (100)	48 (75) 10.7 **
10	受験生たちは掲示板に張り出された自分の受験番号をカメラ付き携帯電話で写した。	36 (100)	39 (60) 18.8 **
11	電灯の光が彼の顔を照らし出した。	32 (90)	35 (54) 13.4 **
平 均		34.7 (94.9)	51.2 (79.5)

() は %

4-3. 母語話者が非受容と判断した項目

母語話者が非受容と答えた項目は、日本語の「～出す」を使うのは不自然であるが、韓国語の「～내다」は使えるものである。韓国語の「～내다」には、前述したように「完遂」の意味があり、そこから何かを「マスターした」「やっとできた」という意味も持ち合わせている。

全項目において母語話者と学習者の間、有意水準 1% (df=1) で有意な差が見られ、両集団に判断の差が出ている。母語話者はほとんどの項目で 5% 以下、11 項目平均が 4.8% の低い受容度を示している⁵⁷ のに対し、学習者側は 11 項目の平均が 52.4% とかなり高かった。すべて韓国語で直訳できる表現であっても、学習者の受容度は項目別に 21% から 90% まで幅広い。その内訳を見ると、「守り出す」、「耐え出す」など、具体的な「移動」の意味と関係ない、動作の「完遂」のみを表す項目に対して学習者の受容度が低い（母語話者の判断に近い）傾向がある。これに対して、動作の完遂の意味と共に具体的なものの移動の意味を含む項目は、受容度が高

⁵⁷ は非受容項目の中で唯一母語話者のゆれが見られた項目であった。これは普通使われる表現ではないが、「取り出す」「引き出す」などと同様に、V1 で移動の方法を表し、「～出す」で外への方向性を表す動詞として解釈できるからではないかと推測される。即ち、「取り出す」「引き出す」が「取って出す」「引いて出す」の意味であると同様に、この「打ち出す」を「打って（打者から遠い外の方に）出す」と解釈することもできる。

表2 受容されなかった項目と受容度

(**p<.01)

番号	母語話者 (N = 36)	学 習 者 (N = 64)	
1	10 年もその秘密を <u>守り出し</u> た。	0 (0)	14 (21) 9.16**
2	北の寒い冬を彼は <u>耐え出し</u> た。	0 (0)	20 (31) 15.5 **
3	私は自分の力で予選を <u>勝ち出し</u> 、決勝に進出した。	1 (3)	22 (34) 13 **
4	最後まで <u>やり出す</u> 覚悟です。	0 (0)	26 (40) 34 **
5	大変な仕事だったが、一人で <u>済み出し</u> た。	1 (3)	31 (48) 22.1 **
6	日本語を勉強してから 1 ヶ月後、やっと仮名を <u>読み出せる</u> ようになった。	2 (5)	37 (58) 22.1 **
7	打者は 3 番目のボールを正確に <u>打ち出し</u> た。	12 (33)	39 (61) 16.6 **
8	血の痕跡は全部水で <u>洗い出し</u> 、何も残ってない。	1 (3)	40 (62) 33 **
9	お母さんは 1 週間かけて、すばらしいセーターを <u>編み出し</u> た。	1 (3)	43 (65) 35.4 **
10	少数点以下は <u>切り出し</u> ます。	1 (3)	44 (68) 40.5 **
11	「これで庭の雑草は全部 <u>抜き出し</u> たね。」	0 (0)	58 (90) 77.7 **
	平 均	1.7 (4.8)	33.9 (52.4)

() は%

く、母語話者とは逆の傾向を見せている。

次の章では、この結果を「自然予想項目」と「不自然予想項目」にわけて、問題別に詳しく考察してみる。

5. 考 察

5-1. 自然予想項目

「受容」の 11 項目のうち、1 の「作り出す」のみ母語話者が学習者より低い受容度 (61%) を示した。これに対して学習者の受容度は 96% と極めて高い。この文はもともと「みんなで一つのことを作り上げる、文化祭のようなノリが楽しい」(新聞)であったのを変えたものである。田辺(1983)は「創出の意味の『～出す』は動作の完了を表す『～上げる』と共通のことが多い」と述べる。ある過程の結果、何かが「完了」され、新しいものが「創出」されるという事態を考えると、「完了」と「発生」とは重なる接点があることがわかる。実際、今度の調査でも半数以上の母語話者がこの「～上げる」を「～出す」に入れ替えた文を受容していた。しかし、「作り出す」はやはり新しいものの「創出」に焦点が当てられるので、このように「完了」・「完遂」のイメージが強く感じられる文に「～出す」を使うことには違和感を覚えた母語話者が多く

出たと思われる。

これに対し、学習者は「完遂」と「創出」との重なりを「～出す」で表現するこの文を非常に自然と感じ取っていた。この項目の「～出す」は、移動性はないが「具体的なものが出てくる」動作と関連があるので、学習者は「～出す」の意味として素直に受け入れることもできるし、母語知識の借用にも疑問を感じなかったと思われる。実際に、被験者に書いてもらった受容の理由に「作って何か出たので」のように「～出す」の意味に注目した判断もあったが、「韓国語の『만들어(作り) 내다(出す)』でも自然だから」のように直訳して自然だという答えと、「何か完成して出たから」など、韓国語のように「完遂」と「出す」を自然に結びつける答えがあった。

反面、2番目に学習者の受容度が高かった「思い出す」の場合、「よく使われる表現である」、「熟語だから」自然だという答えが見受けられた。即ち、母語直訳「생각해 내다(思う+出す)」を思い浮かべたり、「思う+出す」として意味を推測するよりは、1つの言葉として覚えていたのである。これは「思い出す」が普段、初級のテキストより導入される言葉で、「～出す」のうち、もっとも学習者が接した可能性の高い項目であることがその原因であると思われる。

「思い出す」に続いて学習者の受容度が高かったのは「飛び出す」、「引き出す」、「取り出す」で、この3つはいずれも「具体的なものの移動」の意味である。これは、日本語そのままでも、韓国語直訳でも、物理的な動力による具体的な対象の移動が想定されている基本的な意味ともいえる。もし、学習者が母語を意識したというなら、Kellerman(1979)が述べた通り、「母語で無標の項目は転移が起こりやすい」ことから、韓国語の「～내다」の基本的な意味に近いものは「～出す」を使ってもいいと判断したものと思われる。一方、日本語の「～出す」の意味から考えても、こうした「～出す」は具体的な移動の意味が含まれ、「V1して外に出した」の意味である。したがって、V1とV2の意味をそのまま解釈しても、全体の意味の推測が困難ではなかったと思われる。

母語話者に比べ、学習者の受容度が有意に低かった項目は姫野(1999)の「顕在化」に属するものが多かった⁶。特に受容度が低かったものは10の「張り出す」と11の「照らし出す」である。この2つの項目は具体的な移動の意味でもない上に「考え出す」、「探し出す」のような、「完遂」と「出現」の接点にある事態とも思えない。学習者は前述した「作り出す」の例からわかるように、「～出す」に「一定の時間をかけて、何かを完遂して出現させる」というイメージを持っている可能性がある。9の「やっと実の親を探し出すことができた」(学習者の75%が受容)の場合、正しい理由として「『やっと』のような完遂の意味と似合う」「行動の完遂のような感じ」としており、「～出す」に「完遂」の意味を結び付けている学習者がいた。これは母語話者がこの「探し出す」に「隠れていたものを表に出す」というニュアンスを持つのは随分

⁶「張り出す」の場合、姫野(1999)はこれを「具体的な移動」に入れているが、「具体性」と「移動」があるものの、他の「取り出す」、「飛び出す」などの例から感じ取られる運動性や移動の具体性は薄い。

ずれていると思われる。

「思い出す」のようにだれでも聞いたことのある初級レベルの語彙を除くと、学習者が正しいと判断した基準は「何か具体的なものが出る」、「外へ向いた動作」はもちろん、「何かを完遂するもの」もあった。また、母語話者と判断の結果が同じ項目でも、その理解の仕方は必ずしも母語話者と同じではなかった可能性がある。学習者の基準は学習者固有のもので、L1 対応語の概念の影響が感じられた。

5-2. 不自然予想項目

「～出す」が「完遂」の意味を表す不自然な項目の学習者受容度は文によってばらつきがあったが、全体的に実際の移動と「完遂」が結合して物理的な「移動」を「完遂」する意味の項目の受容度が高かった。これに対して、「～出す」が純粹に「完遂」のみを意味する項目の受容度は相対的に低かった。学習者の受容度がもっとも低かった(母語話者に近い判断を下した)のは「守り出す」であった(21% 受容)。これは、日本語では「10 年もその秘密を守り通した」というべき文であるが、韓国語ではこういった場合、強い意志を伴った完遂の意味として「(지켜)내다」が用いられ、正文となる。この文を正しいと答えた被験者はこのような母語の「完遂」の意味を「～出す」で表現することを自然と感じていたと思われる。しかし、母語の直訳としては成立するといっても、より多くの学習者は「非受容」を選んでいて、被験者が書いた非受容の理由の中には「韓国語式の表現」、「『守る』と『～出す』は合わない」という答えがあった。即ち、母語で可能な表現がすべて日本語に直訳できるわけではないという意識を持っていると解釈することができる。また、「～出す」の意味と合わないと答えた被験者は、「守る」は動きがない行為なので、基本的に外への運動性を持つ「～出す」との共起に違和感を覚えたと思われる。

4 の「最後までやり出す覚悟です」(40% が受容)、5 の「大変な仕事だったが、一人で済み出した」(48% が受容)の場合、受容度が高くなっていて、5 の場合半分弱の被験者が受容している。受容と答えた学習者の理由の中には、「～出す」に「不可能なことをできるようにする」、「最後までやる」の意味があるから正しいという答えがあった。強い「意志」がある上、ある事態に対する心的「突破」のイメージが強く感じられたので、情的な動作よりは「～出す」との関連性が見出されたのではないと思われる。次の 6 の「読み出せる」でも、半数を超える学習者が、努力の末に、出来なかったことができるようになる事態に「～出す」を使うことについてあまり抵抗感を持っていなかった。このような項目は、日本語では使われない表現であるので、学習者は聞いた覚えがないはずである。それにもかかわらず 50% を超える学習者が受容したということは、聞いたことのない表現であっても、学習者は自分なりに語彙の意味を類推し、判断していることを示唆している。

母語話者は受容していないのに、学習者が 60% 以上と比較的高い受容度を示した 5 項目は、

外に向かった移動、もしくは、ある程度の具体的なものの出現と関連があった。9の「編み出す」のみ、「移動」とは関連がないが、「完成されて出る具体的なもの（セーター）」が想定されているので、「作り出す」と同様に、受容度が高くなったと思われる。

実験項目の中で、もっとも学習者と母語話者の意見の差が著しかったのは11の「これで庭の雑草は全部抜き出したね」であった。母語話者は誰も受容していない(0%)が、学習者は極めて高い90%の受容度を示した。この文は「雑草を抜く」動作と「庭の雑草を抜く動作が終わった」の2つの意味が重なっており、韓国語においては、この「移動」と「完遂」の結合が自然である(뽑아내다)。「～내다」の場合、自分の領域から何か「出す」、または「なくす」行動と、その行動が完全に終わったことを同時に示す場合が多く、その際、「～내다」が「移動」か「完遂」かは曖昧である⁷。8の「洗い出す」(母語話者は「洗い流す」と訂正した)も、10の「切り出す」(母語話者は「切り捨てる」と訂正した)も同様で、このように「移動」と、その動作の「完全な終了」を表している場合、韓国語は「移動」と「完遂」の2つの意味にまたがる「～내다」を使う(씻어내다, 잘라내다)のが自然である。

このように純粋な動作の「完遂」のみを表す意味で用いられた「～出す」に比べ、「外に出す動作を完遂する」という、移動と完遂の両方の意味を含んだ意味で用いられた「～出す」の場合のほうが、学習者の受容度は高かった。これはL1の「完遂」の意味は、いわゆる「有標」として意識されるが、「移動」の意味が入ることで、基本的な意味として捉えられ、有標性が緩和されたからだと推測される。反面、母語話者はどちらにおいても「～出す」に「完遂」の意味が含まれると、受容度が低くなり、抵抗感を示していた。

6. 終わりに

姫野(1999)は、「～出す」に関して「その意味は、本義に近く、解釈はそう難しくない」と述べている。確かに「～出す」は他の複合動詞に比べそれほど難しい項目とは言えない。しかし、約半数の被験者が能力試験1級を持っていて学習経歴も2～5年くらいの上級学習者であるにもかかわらず、母語話者の判断とは22項目のうち17項目において有意な差を示した。

母語話者の場合、長い間、その言語に接した経験から自然に語彙の意味領域を習得するようになるが、学習者にはこのような意味の内在化が自然に行われにくく、すでに形成されている母語の意味領域の影響を受ける。実際、学習者は判断において、母語知識を頼りにすることがあった。受容の理由を「韓国語(直訳)で自然だから」と答えた人がいれば、「～내다」の意味領域

⁷「～出す」の場合、「移動」/「顕在化」か「開始」かが曖昧な場合が多い。姫野(1999)は「...ミルク色の樹液がにじみ出し、キズ跡を伝わって素焼きの容器にしたり落ちる」が「にじんで出て」か「にじみ始めて」かが曖昧であり、両方の意味を兼ねているという。

をそのまま「～出す」に転移して、「『完遂』と『可能』の意味だから『～出す』は自然」と答えた被験者もいた。また、不自然の理由においても「無理やり韓国語を訳した感じだから不自然」と言って、母語の意味を意識しながら答えたことが窺える。

しかし、学習者の判断には母語以外にも様々な要因が絡んでいた。母語において基本的な意味、具体的な意味（移動）を含んでいる場合、学習者の受容度は高くなる傾向があった。これは母語の「無標」項目は転移されやすいと主張した Kellerman (1979) の理論から説明できるかもしれない。ただし、ここでは L1 でも L2 でも「移動」が具体的に基本的な意味と言えるので、受容の要因が L1 か L2 かは簡単に言い切れない。Tanaka & Abe (1984), Shirai (1995) などの主張のように L1 と L2 の相互作用で、具体的に基本的な意味の方が母語の転移が起こりやすく、L2 の意味習得を促進すると考える。また、このような受容度実験においては学習者の個別例に対する親密度も重要な変数となる。Tanaka & Abe (1984) が「言葉の意味転移は根強い現象」と言いながらも、学習者の判断は学習経験、インプットなど個別のケースによって制限される場合が多いと述べているのもそのためである。今度の実験でも初級の段階から導入され、学習者になじみがあると思われる項目の受容度も高かったが、言葉の意味構造とは関係なく、個別の言葉の学習経験も受容度に影響を及ぼすことはいうまでもない。しかし、学習者は見たことのない表現であっても、自分なりの基準によって判断を下して受け入れることがあった。「済み出す」、「読み出せる」などの例を見ると、これらは学習者が接した経験のないはずの表現である。それにもかかわらず、半分かくらいの学習者がこれら項目を受容していたのである。

学習者の判断基準は L1 知識の選択的な使用、まだ不完全な L2 に対する知識とそれを補うための推論、そしてその語彙に関する学習経験から形成されており、このような様々な要素が介入するために、母語話者とは違う意味領域を持つようになると思う。

今回は学習者の意味概念を見るにあたって、母語の概念を中心として母語では自然な文を学習者がどのように捉えるかに重点を置いたが、学習者の語彙に関する意識と母語の影響の全体像を見るためには、母語にはないが日本語にはある項目に関する調査、および他の母語話者との比較調査も必要であると思われる。より多様な被験者と項目を使った更なる緻密な研究が今後の課題として残る。

参 考 文 献

- 李 暉洙 (1996) 「日韓両語における複合動詞「～出す」と「내다」の対照研究 本動詞との関連を中心に」『日本語教育』89, 76-78.
- 李 暉洙 (1997) 「現代朝鮮語の複合動詞について 動詞の語尾{아}+「내다」を中心」『朝鮮学報』162, 61-97.
- 今井 忍 (1993) 「複合動詞後項の多義性に対する認知的意味論によるアプローチ 「～出す」の起動の意味を中心にして」『言語学研究』12, 1-24. 京都大学語学研究所

- 今井むつみ (1993) 「外国語学習者の語彙学習における問題点」『教育心理学研究』41, 243-252.
- 田中茂範 (1990) 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』三友社出版
- 田中 実 (1994) 「語彙の習得」『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店, 70-88.
- 田辺和子 (1983) 「複合動詞の意味と構成：「～ダス」・「～アゲル」を中心に」『日本語と日本文学』3 筑波大学国語国文学会, 40-49.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 松田文子 (2000) 「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20, 52-65.
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房
- 松本 曜 (2003) 『認知意味論』大修館書店
- 森田良行 (1977) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』14 早稲田大学教育研究所, 69-86.
- Kellerman, E. (1979) *Transfer and non-transfer: where we are now*. *Studies in second language acquisition* 2, 37-59.
- Shirai Y. (1995) *the acquisition of the basic verb Put by Japaneses EFL learners: prototype and transfer* 語学教育研究 12 大東文化大学, 61-92.
- Tanaka, S. and Abe, H. (1985) *Conditions on interlingual semantic transfer*. In Larson, P., Judd, E.L., and Messerschmitt, D.S. (eds.) 101-120.